



ESSAY ~ 霊園に仙台ゆかりの 人をたずねて3~

たこ
蛸 忠太郎 (1896~1975)

「全勝餅」の味を守り、
伝統ののれんを戦後に引き継ぐ



西大立目 祥子

仙台に長く暮らす人なら「蛸屋」という老舗菓子店の名を聞いて、すぐに「全勝餅」を思い浮かべるに違いない。勇ましい菓名とは裏腹に、小豆あんを包んだ白色と白あんを包んだ桜色のやわらかな餅菓子は、仕上げにきらきらと光る氷餅の破片を着せられて、実にやさしい風情だ。日露戦争の勝利を願い、蛸忠太郎が創案した。忠太郎はその息子として明治29年長町に生まれ、分家して長町駅前に菓子屋を興し、太平洋戦争下の空白の数年をくぐり抜けて戦後にのれんをつないだ。

仙台藩の菓子司として荒町付近に営業していた蛸屋が長町に移ったのは、長町に青物市場が開設された明治25年以降のことという。明治27年の日清戦争では長町の臨時停車場から将兵や軍馬が出発し、2年後には一般駅として開業した。そうした活気とにぎわいの中で生まれた菓子はヒットし、軍や学校のお祝い事には決まって全勝餅が使われるようになったという。

「日持ちする菓子として有名だったそうですよ。砂糖をたくさん使っていましたからね」と忠太郎の孫にあたる秀樹さんが話す。忠太郎は静かな人だったが、縁起をかついで名づけたこと、長町駅からたくさんの兵隊さんを送ったことなど、全勝餅の由来やまちの歴史を幼い秀樹さんによく話して聞かせた。



西大立目 祥子(にしおおたちめ・しょうこ)
フリーライター。地元学の視点で仙台のまちや広瀬川について執筆している。著書に『仙台まち歩き』(河北新報出版センター)。

「でも、祖父が一生懸命仕事をしている姿って見たことないですよ。大店のぼんぼんだったからかなあ。いろんな事に興味を持つ人でね」と秀樹さんは笑う。確かに、職人さんを何人もかかえる菓子屋で、息子たちはあくせくせずともすんだのかもしれない。忠太郎には20代のころ、東京で行われた飛行機の日本初飛行を見物に行ったというエピソードが残る。大正5、6年に行われた米国の曲芸飛行家アート・スミスの航空ショーだったのではないと思われるが、仕事は家族と職人にまかせ出かける余裕があったのだろう。

それでも戦時中は息子2人を戦地に送り、菓子製造は休止せざるを得なかった。どんな胸中だっただろう。

幸い息子たちは復員し、長男の正に店をまかせるようになる。忠太郎は孫の秀樹さんを伴って、よく新寺にある菩提寺、孝勝寺に墓参りに出かけたという。「長町から市電に乗って北目町まで行き、下りて歩くんです。帰りは河原町の鰻屋で弁当を買うんですけど、自分の分一つだけ。ちょっと恨んでました」と苦笑いする秀樹さん。蛸家では家族のうち秀樹さんと父が寅年、祖母が丑年で、寅と丑の守り本尊、虚空蔵尊の化身が鰻と伝えられたことから、3人は鰻を口にできなかったという。忠太郎は小学生の孫にもこの教を崩さなかった。いかにも元禄年間創業の老舗の習わしである。

秀樹さんは祖父に「変えない方がいい」といわれながらも、全勝餅の砂糖の量を減らしてきた。「甘すぎる」というお客様の声に答えてのことだ。しかし、添加物を使わず、どこにも卸さず、目の届く自分の店だけで売るといふ祖父との暗黙の約束は守り続けている。



人工の着色料を使わないため、朝に桜色だった餅は午後には色が薄くなる。

